

自然との共存を目標に、 夫婦で取り組む減農薬栽培

北田 恭浩 (34歳) 恵美 (34歳)

― 五條市御山町 ―



北田夫妻の畑で収穫を待つナス

だったが、両立していくことの限界を実感。職場結婚を機に退職していた妻・恵美さんも「不安はありましたが、農業一本にするなら応援しよう」と決めました」と背中を押してくれた。恭浩さんも会社を辞め、専業農家として二人三脚でのスタートを切ったのは共に29歳の時だった。そして、ナスは恵美さんの担当、柿は恭浩さんと、それぞれ分担して営農することを取り決めた「家族経営協定」を締結。重労働全般は恭浩さんが受け持つといった具合に助け合いながら、担当分野に責任を持って取り組んでいる。

太陽の光、水、空気。自然への感謝をいっどんな時も

ナス畑に足を運ぶと、畝の横にマリー



ナス、柿、水稻を家族で切り盛りする

ゴールドの苗が植えられているのに気づく。就農当初からずっと減農薬栽培に力を注いできた北田家にとって、これらは「天敵の活用」をするためだ。露地ナス栽培では、アザミウマという害虫が問題となる。そのアザミウマの天敵がヒメハナカメムシであり、フレンチマリーゴールドのあざやかな黄色い花にはヒメハナカメムシ類が生息する。それらがアザミウマを食べるといふ自然の流れにより、結果的に農薬の量を減らすことに成功したので。

奈良県認定エコファーマーの資格についても、夫婦それぞれが取得。消毒回数を基準値より減らす取り組みが大きく評価されたのだ。「光、水、空気。農業を営む上で8割は自然の力」と恭浩さん。だからこそ、自然への感謝の念をいっどんな時も忘れず、目指すは自然と共存していく「環境保全型農業」だという。



ナス担当の恵美さん。恭浩さんと同様にエコファーマーの資格をもつ

幼少の頃から「好き」という情熱が原動力に

全国有数の柿の生産地として知られる五條市。のどかな風景が広がるこの地で、柿と露地ナス、稲作に取り組んでいるのが北田恭浩さん・恵美さん夫妻だ。柿は和歌山県の千且(せんだ)青果に卸して、東京の太田市市場や千葉青果など関東方面へ出荷。ナスは農協から大阪の(株)南大果へ、さらに独自のルートで個人に向けた直販にも力を入れている。

兼業農家として稲作をする祖父母の背

周囲の人に支えられながら、 やわらかな心で日々勉強中

倉庫に置かれた書棚には、定期購読している専門書とノートが数冊、農業新聞のスクラップなどが並ぶ。「柿」「なす」と書かれたノートを開くと、細かな文字がびっしりと。たとえば、化学肥料の量とそれによる成長度合いの変化の記録。たくさん失敗を経験したからこそ、忘れないように記録する。書くことで徹底的に頭の中にインプットしていくのだ。「驚くほど正確に記憶しているんです。尊敬しますね」と、恵美さんも感心する毎日だ。

夫婦そろっての認定農業者の取得手続きや減農薬のための天敵活用については、市の農林課や県の出先機関である南部農林振興事務所にも助けられた。現場の担当者をはじめ、地域の先輩、同業者、家族。多くの人に支えられながら「まだまだ勉強中です」と恭浩さん。好きな農業を続けられる毎日は、充実していて楽しいのだそう。

良いものを作る。同じ目標に 向かって家族で力を合わせて

豚糞を使った堆肥栽培を軸に、適正施肥に努める毎日。今後、新たに取り入れるたいのは「竹パウダー」だ。竹パウダー



秋の収穫が今から楽しみだ



堆肥栽培で大切に育てられる柿の苗